

稲陵会報

第57号

発行 学校会
横田高等 令和5年
稲陵 3月1日

ごあいさつ



稲陵会 会長
石原 肇
(第42期)

皆様如何お過ごしでございましょうか。稲陵会や母校発展のためにご支援ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

横田高校創立百周年記念式典が挙行されてから、4年が経過しました。丁度、新型コロナウイルスの流行期間と重なり、評議員会は地区代表会として開催したものの、町外の支部総会は中止となりました。

昨年の支部総会は、町内の三成・阿井・横田で開催されました。その中で、横田高校の新たな取り組みが紹介されました。高校魅力化の取り組みとして、稲陵会や地域共同体との連携を基本とする高校魅力化を推進する旨の説明がありました。

また、横田高校や稲陵会に対する要望や現況を聞きました。「部活動の動画を見たが、生徒の生き

生きとした姿が印象的。」「ホッケーの優勝は、卒業生にとっても、生きる力の元になる。」「高校での奥出雲学や農業体験は有意義なので、もっと努力してPRしてほしい。」「地元の専門学校や企業に進ませてほしい。」等々。

また、会員の皆様方からは、「野菜や花作りに精を出している。奥出雲の自然は素晴らしいので、地域連携を進めてほしい。」等々。

地域連携の中で、少しずつ実践されているケースもあります。高校生と地域住民との体験型農業・寮生への牛肉(奥出雲和牛)の提供・仁多弁の本を作り横高に90冊贈呈・奥出雲学での実践等です。

男子ホッケー部の全国制覇三冠達成(インターハイ・国体・全国高校選抜)は、卒業生として大変うれしい限りです。生徒や監督の先生のご努力はもちろん、保護者のみなさんの熱意や小中学校や地域との連携があればこそなした業績だと思っています。

少子化等による横田高校の生徒減は依然深刻な課題です。更なる学力充実も含め母校の発展を期待しています。

高校の地域連携は、今後も更なる検討が必要であり、高校生と住民の交流は、5年先、10年先を見据えて話し合いの機会を増やすべきと考えますがいかがでしょうか。

今後とも、変わらぬご支援ご鞭撻承りますようお願い申し上げます。

つながりに感謝!!



校長
深田 新

こんにちは、本校勤務2年目となりました深田でございます。稲陵会の皆様方におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。また、平素より本校の教育活動に対しご指導・ご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

依然続くコロナ禍により各支部活動の自粛が続いておりますが、令和5年こそ全国でご活躍の先輩方にもお会いできることを楽しみにしております。町内では久しぶりにお祭りや会合が開かれ、その席に参加させていただく機会があり、少しずつですが地域の皆様方との交流が増えました。先日は奥出雲弁研究会で「活躍の先輩方が来校され、会話文や使用語句

の注釈などを盛り込んだ「がいに おもっせえ」奥出雲弁学習書をご寄贈いただきました。また、奥出雲和牛や仁多米なども御寄贈いただき、本校が稲陵会の皆様方によって支えられていることを実感する出来事でした。

12月下旬、「全国高等学校選抜ホッケー大会」が岐阜県で開催、男女ホッケー部がアベック出場しました。現地に駆けつけられた稲陵会の若い諸先輩方や保護者の皆様方と一緒に私も応援させていただきました。女子は準々決勝で惜敗し悔しい思いをしましたが、男子が見事に優勝を果たし、念願の「高校三冠」(14年ぶり2回目)を達成、地元奥出雲町や島根県を大いに盛り上げています。このように、諸先輩方と悔しさや喜びを分かち合いながら生徒に寄り添うことができました。3月末に剣道部が全国選抜大会(女子団体)への出場、美術部も来年度全国総合文化祭への参加を決めております。今後ともご支援の程宜しくお願いいたします。

話は変わりますが、今年度より学習活動の更なる充実をめざし「横高たたら学力育成プロジェクト」をスタートさせ、中堅教員が中心となりいろいろな取組を実施しております。たとえば、社会に開かれた教育の試みとして、稲

陵会の皆様方にも外部講師として授業でご指導していただいております。また、本校にはボランティア活動を行う「地域活動FUN! CLUB」という生徒の自主的団体があります。この度、この「地域活動FUN! CLUB」の活動が、県の社会貢献活動推進に寄与するところ大であると認められ、「島根県民いきいき活動奨励賞」(ユース部門)に輝きました。生徒たちは、地元の諸先輩方との地道な活動が認められ、より一層ふるさとを愛し、大切にしたいという思いを強くしているところです。これも、諸先輩方のご協力のもとで実施してきた「奥出雲学」の成果の一つと言えるのではないのでしょうか。

こうして学校生活を振り返りながら、私は、本校が稲陵会の諸先輩方と密につながり共に歩み続けている高校であることに改めて気づかされました。生徒たちを陰に陽に支えていただいていることに對して感謝してもしきれません。今後、そのご恩に報いるためにも、教職員一同、「耕心培学」の教育目標のもと魅力ある学校づくりに邁進し、成長した生徒を皆様のもとへ送り出したいと思っています。

これからもご指導の程宜しくお願い申し上げます。

支部だより

三成支部代議員総会

支部長

安部 隆史

(第63期)

7月27日(水)、カルチャープラザ仁多農事研修室において、三成支部代議員総会を開催しました。来賓に稲陵会の石原会長、安部副会長、細木副会長、末森副会長、高校から深田校長先生のご出席をいただきました。

はじめの支部長の挨拶では、少



況、総合的な探究の学習「奥出雲学」の取組や学校行事についてスライドで紹介いただきました。

子高齢化の中、生徒数減少の課題について、地域をあげて生徒確保など協力できることをしていく必要があると述べさせていただきました。

そして、総会の議事では、支部の事業報告と決算報告を説明し、新年度の事業計画・予算案について承認いただき、役員改選については副支部長の交代があり決定いたしました。

支部長 安部 隆史

副支部長 恩田 延明(新)

副支部長 錦織 浩利(新)

監事 鶴原 英樹

監事 石田 恭二

顧問 山本 勝昭

幹事 谷山 貴宣(事務局)

幹事 内田 直輝(会計)

また、深田校長先生から、高校の生徒たちは、学力向上、部活動、ボランティアを通して自身を磨いており、地域とつながる総合的な探究の学習では、地域の皆様

の力添え、ご支援をお願いしたいとの挨拶がありました。その後、高校の取組について、高校魅力化コーディネーターを務める細木副会長より、学校、生徒の状

況、総合的な探究の学習「奥出雲学」の取組や学校行事についてスライドで紹介いただきました。

その後、高校の取組について、高校魅力化コーディネーターを務める細木副会長より、学校、生徒の状

支部長

小田川 謙一

(第53期)

稲陵会阿井支部は、令和4年度阿井支部総会を8月5日(金)午後7時より阿井コミュニティセンターにて開催しました。

今年度も、新型コロナウイルス感染症の影響を受ける中でしたが、阿井地区の会員の皆様に稲陵会や横田高校の活動の様子を伝える大事な機会と捉え、感染症対策に留意したうえで開催したところです。

当日は、稲陵会より石原会長をはじめ安部副会長、細木副会長、末森副会長に、横田高校より深田校長先生、植田校内幹事長にご臨席頂きました。

総会の冒頭、石原会長及び深田校長先生にそれぞれ挨拶いただき、母校発展に向かって稲陵会が担う役割について改めて再認識したところです。また、横田高校魅力課コーディネーターとして務めておられる細木副会長には、横田

阿井支部総会



高校生の活動について映像を交えて紹介いただきました。リアルに伝わる後輩達の活躍の姿を頼もしく感じたところです。

総会の議題として提出した事業報告及び会計報告、次年度の事業

また、任期満了による役員改選により次の通り新役員が選出されました。

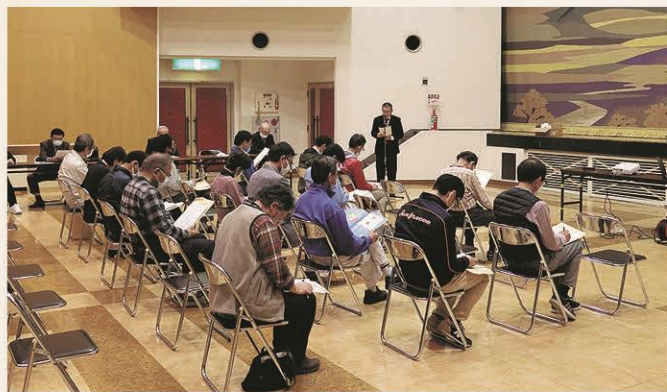
最後になりましたが、会員皆様のご健康と、稲陵会及び母校の益々の発展を祈念申し上げます。

(第54期)

横田高校の学校教育目標に「耕

嬉しさがわいてきました。

会議での主な内容としては、令和2年度からの稲陵会費の集金状況と収支決算（会計監査報告）の報告をしてこれまでお世話になった役員評議員の方々に感謝し、お礼を申し上げました。役員の交代として私事ですぐ事務局長（平成19年度から）を退き新しく大市の藤原道則さんに就任していただき、本年度の会費の集金には同じように各自自治会の担当者である地区評議員の皆様方をお願いにあわせて依頼をいたし了解を得ることになりました。評議員会を終りました。



より現在では今回のような会議のみで実施していますが、コロナ禍以前は、料理屋さんにて会議をしてその後は飲食に伴い出席者の会費により懇親会を行っていました。

冒頭で述べました耕心培学は
目指すべき資質・能力として、①
自己実現力②コミュニケーション
力③多様性理解力④課題解決力で
学びに向かう気持ちの熟成に力を

この懇親会は型にはまった会議と違って大人の付き合いでの交流であり、それぞれの思いを言い、若き日の思い出や今後の支部活動などに話が弾むと共に母校と稲陵会の発展のための集いとなっていました。早期にコロナ禍が収束して、方法は異なっても以前のように入れるとあります。このことは私自身として学校での教育だけではなく高校を卒業して稲陵会員となり、社会人そして大人になっていく過程において、この耕心培学を一生のものとして気にとめていたことと思っています。今になって、この横田の地で生活し仕事や

[illegible]

地域活動をしてきて基本的な社会の一員となり得たのなかかどうかと感じています。

昨今では目標として人生百年時代と言われていて、そうなれば約3分の2を経過したところであり、これからまだまだ成し遂げられるように励んでいきたいと思えます。また、これからを担っていく次世代の子供たちに耕心培学の精神が確実に受け継がれていくことを願っています。

追悼 千原忠二さん



稲陵会広島・山口支部
副会長 行武 郁子
(第39期)

千原忠二さんは馬木出身で第37期卒。稲陵会広島支部結成37年目の平成13年度広島支部長に就任されました。発足40周年に当たって、山陽・四国・九州の交流を目指して、広島支部は広島・山口支部と改められました。

忠二さんは平成18年の会報の近況報告で「『人生、初めと最後は同じことをしてもいいか!』と自分に言い聞かせ取材に駆け回っている。いま再び『原点』に」と書かれています。平成13年9月10日発行の「ひろしま稲陵会創刊号」以来、千原忠二さんの力で立派な会報が続いています。

私が岡山から三原市に帰った日の夜、時間外に診療所のベル。「三原ですがお願いします」と女の方でした。保険証を見るとご主人の名前は三原光とありました。阿井小学校に入学した時の隣の席の三原さんでした。そのご縁で稲陵会も一緒に三原から広島に行き、出席して千原忠二さんに再会。横田高校に入学した

時、従兄の藤原肇が庭球部だったこともあって、経験もない私でしたが入部し、ラケットの持ち方・握り方を教えてくださったのが三年生の千原忠二さんでした。

追悼文の依頼を受けて、生前忠二さんから宇品(うじな)に変わるからと聞いていたので、友人の会員から住所を聞き、奥様にお便りしました。お返事には、昨年12月15日に救急で入院、急性骨髄性白血病と診断され、今年1月14日に逝去、稲陵会の皆様によりしくお伝えくださいとの旨がありました。11月22日、田舎の実家に分骨し、両親や兄と一緒に故郷に帰れて喜んでいるでしょうとも記されていました。

改めて支部会報を、創刊号から忙しくて読んでいなかったところも読みました。私自身もよく取り上げてもらっていて、忠二さんの会員への温かい想いを感じ、お世話になっていたのだと感謝の気持ちで涙が止まりませんでした。ありがとうございました。



千原忠二さん

「奥出雲ことば」の 発刊について

奥出雲ことば研究会事務局
副会長

宇田川 和義
(第46期)

奥出雲町は、日本神話のふるさとであり、たたら製鉄の営みと共に固有の風土が育まれ、その暮らしの中から仁多弁といわれる独特の方言が生まれています。

古くから伝わる方言は、誰にも親しみやすく、様々な意思疎通ができ、円満に暮らすことできる大切な暮らしのことばです。

現代では、標準語による学校教育と共に、子供に方言を教えない家庭が多くなり、さらにメディアやITの発達により、方言は使われなくなり消滅の危機にあります。

松本清張の不朽の名作『砂の器』でも紹介され、全国的に知られる、奥出雲の方言(奥出雲ことば)について、地域や家庭、学校などでふるさとの文化として次世代へ継承する趣旨で「奥出雲ことば」を発刊しました。

この編集に当たっては、町内有志と、方言研究者のサポートを得て、学問的な裏付けに配慮すると共に、今後継続的に多様な調査研究に取り組み、その成果を地域振興と郷土の誇り情勢に役立てる活用を目指しています。

まずは横田高校生に「奥出雲ことば」を活用し会話体験していただき、方言の面白さと暮らしを物語る言葉から、郷土のぬくもりと、故郷愛を育んでいただきたいと、この度、安部悟(第68期)会長と共に母校を訪問し、90冊贈呈させていただきました。

今各地で求められる地方創生は、その土地の自然や歴史、人々の暮らしなどがテーマとなっており、特に土地の文化はことばと共に伝えられるため、日本農業遺産など奥出雲ならではの魅力を伝える生きた方言の活用と、次世代への継承に努めたいと考えています。



「奥出雲ことば」の購入等お問い合わせ先
事務局・奥出雲多根自然博物館内
0854-15410063

社会的奉仕活動の一環として、仁多ライオンズクラブと横田ライオンズクラブは令和3年から横田高等学校寮生を激励するため、牛肉を贈呈しています。奥出雲和牛は名実ともに、和牛の頂点と呼ぶに相応しい最高品質の和牛です。今年度も昨年の12月15日に横田ライオンズクラブ細木晃会長(第59期)、仁多ライオンズクラブ金倉弘美教育委員長(第48期)、私、仁多ライオンズクラブ響芳秋(第52期)と内田雅人情報委員長(第64期)の4名で横田高等学校を訪問しました。当日は寮生2名と教職員の皆様に出迎えられ、セレモニーに続き奥出雲和牛8パックを寮生に贈りました。寮生みなさんに良質な牛肉を堪能していただき、充実した学校生活を送っていただければ幸いです。今後横田高等学校とライオンズクラブをはじめ、地域の団体との交流が深まっていくことを期待します。

仁多LC 響 芳 秋
(第52期)



教育実習を終えて

田中 惇裕 (第99期)

はじめにコロナ禍の中、母校で教育実習ができたことを教職員の皆様、生徒の皆様から感謝申し上げます。

私は在学中に受験勉強に取り組む中で、教師を目指すようになりました。私はあまり成績のよい生徒ではなく、受験勉強の時も大変苦労しましたが、先生方の熱心な指導により、成長を実感できるほどに成績を上げることができました。その時の自身の感動を、自分と同じように勉強や部活で悩む生徒に伝えたいと思うようになり、また、教師は人を育てることのできる素晴らしい職業であることに気付いたことから、教師という仕事を目指すようになりました。

私にとって横田高校は教師を目指すきっかけとなった特別な場所であり、その横田高校で教育実習を受け入れてくださるようになったときは本当にうれしかったです。

久しぶりに戻ってきた母校は懐かしくもあり、新鮮でもありました。教育実習生という立場で教壇に立つと、生徒のころは見えなかった部分

に気付くようになり、実際に生徒指導や授業に取り組むことで教師という職業の難しさ、やりがいなど、様々なことに気づくことができました。特に、興味関心を高めようと工夫を試みた授業で、生徒のみなさんが悩みながらも答えを導き出してくれた時の感動は、ほかの何にも代えがたいものでした。この経験で、より教師になりたいという思いが強くなりました。

横田高校で過ごした3年間、そして今回の教育実習3週間で得た学び、経験は、今後自分が教師を目指すしていくうえでかけがえない財産になります。横田高校の先生方は自分の目標とする教師像の一つとなりました。本当にありがとうございます。



令和5年度入学生からの

新しい制服が

決定しました!

横田高校は、誰もが安心して通える学校づくりをめざしてさまざまな取組をしてきました。

制服(服装規定)の見直しも、その一つです。

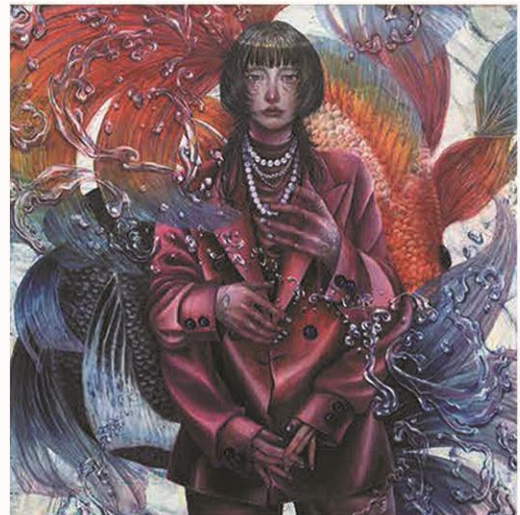
令和3年度に立ち上げた「横田高校の制服のあり方を考える会」を中心に話し合いを進めてきました。

昨年度の冬には本校生徒・教職員および地元の高中生・保護者の皆さんを対象にアンケートを行い、その結果も踏まえ、さらに話し合いを重ねることで決定に至りました。



美術部

高総文祭出品



令和5年度高等学校総合文化祭出品

山田 奈那子

私は、この作品に「転生」というイメージを込めました。具体的に説明すると、青と赤の金魚が円を描きながら泳いでいる様子や渦巻く水の様子から生命は、循環しつづけると考え、表現しました。また、中心の女性は既に死を迎えてしまっています。なので、死に対する苦しみや悲しみを知っています。ですがこの女性は転生しようとしています。

人間は転生するかどうか分かりませんが、もし自分が死んでしまい転生したらどのように思うのでしょうか。そういうちょっとした疑問をこの絵で表現しました。まだまだ技術力が足りないところもあります。美術部員みんなや先生のアドバイスを受け、二年間の集大成となるいい作品が描けたと思います。全国高等学校総合文化祭では、他県の選ばれた作品をよく観察し、自分の表現の幅を広げたいと思っています。

剣道部女子

新人戦勝利



主将 吉原 桃胡姫

私たち剣道部女子は、12月に行われた新人戦で中国大会と全国選抜大会への出場が決まりました。コロナ禍で県外の選手と練習ができていなかった中、県外の選手と試合をすることは貴重な経験となるので、この二つの大会を通して多くのことを学び、来年度のインターハイ出場を目指していきたいし、個人戦ではなく団体戦なので、一人一人がチームのために役割を全うし、チームで勝利できるように頑張りたいです。また、このチームは先輩後輩関係なくアドバイスし合えるチームなので、3月の大会までに個人の力とこのチームの魅力を最大限に発揮できるような稽古をして、日頃支えてくださる先生や地域の方々感謝しながら島根県代表チームとして正々堂々と戦ってきます。応援宜しくお願いします。

男子ホッケー部

14年ぶり三冠!



主将 佐伯 昂 大

私たち男子ホッケー部は、一昨年12月、「常勝」を目標に掲げ新チームの活動をスタートさせました。冬場は走り負けない体力を付けるためのトレーニングに励み、シーズンが始まると、実践面の強化を図るため、練習中とはかく自分達で考え、話し合い、様々な戦術を試すことを繰り返して行いました。8月のインターハイ、10月の国体優勝は、その努力の成果の現れだと、共に苦しい練習を乗り越えた部員全員の喜びになったと同時に、「高校三冠」というプレッシャーを背負うことにもなりました。12月の選抜大会を迎えるまでには、私も含め、部員の度重なる怪我があったり、降雪のためコートで練習することができなかったりと、不安を抱かざるを得ない状況がありました。ですが、今年度のチームの一番の強みである「信頼感」によって、「このチームにできないことはない。このチームだからこそできる。」という強い気持ちで試合に臨むことができました。三冠を達成したときには、安堵感と、これまで支えてくれた家族、応援してくださった地域の方々、ご指導くださったホッケー関係者の皆様・先生方、全ての人への感謝の気持ちで一杯になりました。沢山のご声援、本当にありがとうございました。来年度、新チームは、高い目標を持って日々鍛錬して欲しいと思います。私たち三年生も「現状維持は後退と同じである」という思いを持ち、更なる高みを目指していきたいと思っています。これからも応援宜しくお願いします。

OBからのメッセージ

『感謝』

横田高校ホッケー部OB

伊藤 太 亮 (第89期)

横田高校ホッケー部の皆さん、関係の皆様、高校三冠達成おめでとうございます。私が学生の頃から14年の月日が経ち、今回、横田高校ホッケー部の三冠達成のお知らせを受けたときは、心から嬉しく思いました。高校ホッケー界では、今年は、横田高校が強いとずっと言われており、選手の皆様や関係の皆様にも大きなプレッシャーがあったことと思います。それをほのけ、この大きな目標を達成できたことは選手の努力はもちろん、関係の皆様の大きな支えがあったからこそだと思います。何よりその大きなプレッシャーのかかる試合でも心からホッケーを楽しんでいたからこそ、このような結果につながったのだと思います。また、動画配信にて、優勝した時に主将の佐伯君が、仲間「ありがとう」と伝えている姿がありました。その姿を見て、本当に素晴らしいチームであると感じました。私が高校生の時にも、感謝の気持ちを忘れるなど指導していただき、それは今でも自分の行動の原動力になっています。自分たちが三冠を達成できたのも本当に多くの方々のご指導ご支援のおかげであったと改めて思い返しました。地域の皆様に見守られ、活動できることは当たり前のことではありません。この「感謝」を「未来」につなげていってほしいと思います。

横田高校に新たな歴史を作り、横田高校のホッケーの魅力を全国に轟かせてくれた皆さん、私は、横田高校ホッケー部のOBであることを誇りに思います。後輩たちの高校三冠達成というこれ以上ないくらいの刺激をもらいましたので、自分も負けないように頑張ります。ありがとうございました。



全日本高校選抜大会優勝を達成した男子ホッケー部(前列左から右へ)

島根県立横田高等学校内 電話番号0854-52-1511